武川鎮軍閥の形成

谷川道雄

一　はじめに

趙翼の『廿二史劄記』一五に「周隋唐皆出自武川」なる一節があり、大要次のように述べる。「天地の間の王気は流転して一定しないが、時にその力を一つの場所に厚集することがあれば、帝王がそこから現われる。たとえば南北朝の分裂時代には、南と北とでその気の凝集するところがそれぞれ異なる。劉裕の出た京口、蕭道成・蕭衍の南蘭陵、陳霸先の呉興、それらの地点はすべて数百里の地域の中にある。これに対し、北魏が亡びたあとの周・隋・唐三代の祖先は、ことごとく武川の出身である……。この区々たる弾丸の地武川から、三百余年にわたる隋唐統一帝国を創出し得たのは、まさしくこの土地が盛大なる王気の凝集点だったからではあるまいか」。

王気とはいかにも直観的で、かつ神秘主義の弊を免れない表現ではあるけれども、右の一節は、王朝権力の成り立ちを考える上で、なかなか示唆に富む発想といわなければならない。王朝権力の発生には、どの地域も同じように関わるというわけではない。必ず特定の地域が帝王たるべき人物を生んで、その手によって政権が打ち樹てられ、これが全国を支配するに至るのである。それでは、帝王たるべき人物を生むのはどのような条件をそなえた地域であるのか。それについて趙翼は、ただ王気の厚集するところ、というだけで、それ以上に述べることがない。

趙翼のいう南朝諸天子の発祥地たる京口—南蘭陵—呉興と

いう地域は、長江下流南岸の地である。京口（江蘇・鎮江）と南蘭陵（江蘇・武進）はいずれものちの江南河の沿線に位置し、呉興（浙江）は太湖南辺にあって、この三つの地点を含む地域は、いわば首都建康の豊かなヒンターラントであった。それは経済的にそうであったばかりでなく、人的にそうであった。この地域は江南土着豪族の聚居地であったと同時に、北方から避難渡来した人びとの僑寓の地でもあった。こうした人びとは建康政権を支える現実的な力であったと同時にまた、その腐敗に対しては強い批判性をもつ人びとであった。要するにこの地方は、政治・経済・文化の各方面においてエネルギーを深く蔵した場所であったと考えられる。この地方から劉・蕭・陳のいわゆる寒門武人が現れて革命を起し、南朝歴代政権を打ち樹てるのであるが、趙翼のいわゆる王気を享けたかれらが、その資質によってどのように革命勢力を結集し、旧政権を凌駕して行ったか、その具体的検討はいまは省略に従いたい。

本稿で取り上げたいとおもうのは、北朝後期の武川についてである。周・隋・唐の各創建者宇文・楊・李の各氏が共通に北魏六鎮の一つである武川鎮の出身者であったという趙翼の指摘は、今日ではほとんど定説となっている。[1] さらにこれら各氏の共通な地盤となっている軍事勢力を武川鎮軍閥と称することがあり、[2] 本稿もこの名辞によって如上の問題を考察しようとするものである。

後述するように、西魏以降の関中政権は、決して武川鎮出身者のみによって構成されるものではない。その他にさまざまの胡漢の勢力を包括するのであるが、陳寅恪氏はこれに関隴集団という名称を与えた。「宇文泰は関隴胡漢民族の武力・才智ある者を打って一丸として覇業を創立し、隋唐がその遺産を受継ぎまたそれを拡充したのである。その皇室および佐命の功臣はすべて西魏以来この関隴集団（傍点引用者）中の人物であって、所謂八大柱国の家がその代表である」（『唐代政治史述論稿』上篇）と。陳氏は、経済・文化の面で立ちおくれた関中地方に建国して氏のいわゆる関中本位政策を実行した周・隋・唐の歴代王朝の方がむしろ、進んだ山東・江南を征服して中国再統一を実現したという。したがって氏のいう関隴集団とは、一種の地域的な文化世界を指示するものであって、それは胡と漢、武力と才智というように、さまざまの異なった種族や人間的能力が混融し複合化した社会なのである。[4] しかしこのような複合的社会が成立するためには、それの核心となる集団の活動が必須となるであろう。ここに武川鎮軍

閥といわれるものが関ってくるのであるが、本稿ではその成立過程について、若干の考察を加えたいとおもうのである。

二　関中政権の成立と武川鎮グループ

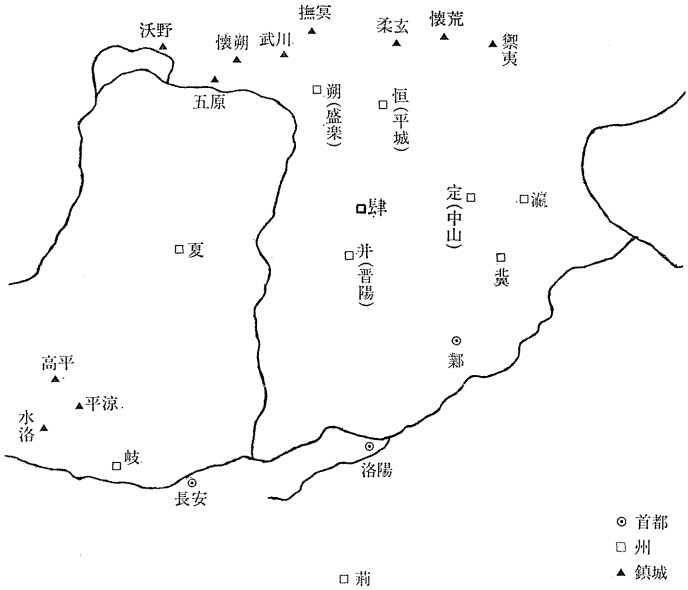
(i)　六鎮の乱と武川鎮

武川鎮は北魏六鎮のうち西から三番目に位置する軍鎮であり、現在の内モンゴル自治区呼和浩特北方にあったと推定される。[5] 五二四年、沃野鎮に始まった反乱が北鎮地帯に広がってゆくと、武川鎮も戦火にまきこまれるに至った。ただ武川鎮の場合、内部から火の手が挙った沃野鎮と異なり、反乱情勢は外側から押し寄せたようである。沃野鎮暴動の首謀者破六汗拔陵から王号を授けられた衛可孤[6]が武川鎮を包囲したのである。そして武川鎮はついに陥落したが、やがて鎮民の一部が起ち上って衛可孤を襲殺した。このように、外部からする反乱民の侵攻に対して、内部鎮民の抵抗という関係が、このときの武川鎮に特徴的な状況である。この経過をもう少し詳しくたどってみよう。

これよりさき破六汗拔陵の侵攻をおそれた懐朔鎮将楊鈞は、武川鎮の軍主をつとめていた賀拔度拔の勇名を聞き、懐朔鎮に招いて統軍とした。度拔は三人のむすこ允・勝・岳及び「郷中の豪勇」を率いて赴任した。このとき允ら三兄弟も同鎮の軍主に任ぜられている。しかし衛可孤は武川鎮を包囲したばかりか、懐朔鎮にも攻め寄せ、懐朔鎮は外援もなく孤立を深めるばかりであった。そこで賀拔勝は包囲網を突破して朔州にたどりつき、討伐軍司令官の臨淮王元彧に面会して援軍を求めた。彧は援軍の派遣を約したが、それが実行を見ないうちに、武川・懐朔の両鎮は陥落するに至ったのである。賀拔父子も当然反乱側のとりことなった。しかし賀拔度拔らは宇文肱（宇文泰の父）と謀り、「州里の豪傑興珍・念賢・乙弗庫根・尉遲真檀らと義勇を招集し」（『周書』一四賀拔勝伝）て、衛可孤を襲い殺した。[7]

この経過を見ると、賀拔氏をはじめ武川鎮内の人びとは反乱鎮圧の側に立って活動している。しかしかれらの手で鎮を守り通すことはできなかったようである。その後賀拔度拔は鉄勒と戦って歿し、允・勝・岳の兄弟は、五原の討伐軍司令官広陽王元淵のもとに奔り、その部将となった。だが破六汗拔陵がやがてここも包囲するに至ったので、淵は五原を撤退して朔州にしりぞいた。賀拔兄弟もこれに従い、のちさらに行台元纂の麾下として恒州（旧都平城地方）にあったが、その

恒州もまた朔州城民鮮于阿胡の手中に陷った。このとき恒州では城中から阿胡に呼応する者があり、その混乱のために賀拔三兄弟のうち允・岳と勝とは、離ればなれになってしまった。允と岳は、当時山西・北秀容から政局収拾に乗り出してきた爾朱栄のもとに奔って晋陽に落ち着いたが、勝のみは肆



州にのがれた。のち爾朱栄が肆州を占領したので、三兄弟はここに再会を得たのである。

(ii) 武川鎮民の南下

饑餓状態にあった六鎮の民衆は、反乱に加担すると否とにかかわらず、全体として中国内地に向って南下してゆく形勢にあった。武川鎮民もその例に洩れないが、しかしその南下のコースは必ずしも一様ではない。北魏討伐軍に従って南移して行った賀拔兄弟の上述のコースはその一つにすぎない。これに対し、宇文氏などの動向はやや異なる。前述したように、衛可孤襲殺に成功したにもかかわらず、武川鎮を支えることは困難であった。一方、破六汗拔陵の方も、北魏朝廷の委託を受けた柔然の襲撃を受けて、北鎮地帯を守ることができなくなった。こうした状況のもとで、官軍に降伏して庇護を求める鎮民の数はおよそ二十万人に及んだ。朝廷はこれらを河北中部の冀・定・瀛三州に分処して就食させた。宇文氏は定州に配属されているが、同じ定州に遷された鎮民のなかに、独孤氏や王氏など武川鎮出身者の例が見られるのは、[8] 同じ鎮の出身者がある程度のまとまりをもって移動したことを示すものではなかろうか。

この河北の降戸のなかから反乱の炎が再び燃え上がって、北魏王朝の死命を制する内乱を醸成したことは、知られる通りである。内乱の火種の一つは、五原の降戸鮮于修礼らが定州の左人城で挙兵したことにある。このとき宇文肱は修礼の部将をつとめ、官軍と戦って陣歿した。[9] やがて修礼の部下の葛栄が反乱勢力のリーダーとなり、上谷に蜂起した柔玄鎮民杜洛周の勢力をも併合して、河北一帯を制圧しようとする形勢にあった。葛栄は肱の第三子洛生に漁陽王という位を与え、父の部隊を引きつがせた（『周書』一〇杞簡公連伝）。弟の泰もこのとき将帥に任ぜられたという（同上一文帝紀上）。泰らは葛栄が成功おぼつかなしと見て脱出を謀ったというが、実行に至らぬ前に、葛栄は爾朱栄に敗れた。こうして葛栄のもとにあった厖大な北方鎮民はそのまま爾朱栄の手中にはいった。爾朱栄の本拠は晋陽にあり、宇文泰らも晋陽に遷された。このとき宇文氏と同じように爾朱栄のもとに入った武川鎮出身者に、独孤・趙の二氏があり（『周書』一六独孤信伝・趙貴伝）、また、賀蘭[10]・尉遲[11]二氏の子弟も宇文氏の庇護の下に、晋陽に移っている。

宇文氏らよりも早く爾朱氏に隷属していたと見られる者に、賀拔兄弟のほか、侯莫陳氏や寇氏がある。[12] しかしともかくも、武川鎮民の各家は、鎮を去ったのちさまざまのコースを経て、晋陽の爾朱氏のもとで落ちあうことになったのである。六鎮の乱以来の北方諸勢力は当時爾朱氏の手で統一されるわけであるから、武川鎮出身の各家が爾朱氏の本拠である晋陽で合流したのも、時のなりゆきであった。

晋陽に合流したかれらは、やがて軍事行動を共にすることになる。賀拔岳が爾朱天光の副将として関隴地方の反乱討伐に赴くことになり、武川鎮の人びとも多く従軍したからである。もっとも、武川鎮出身者のすべてがこれに参加したわけではない。たとえば、岳の兄の允と勝、あるいは独孤信などは加わっていない。独孤氏はのちに、楊忠と共に賀拔勝の麾下として、荆州方面を鎮守することになる。また、従軍者の妻子なども晋陽に残したままであった。そして、この関隴討伐への参加ということが、やがて武川鎮軍閥形成の起源をなすのであるが、それについては後考にまちたい。武川鎮出身者の個人的レベルでいうならば、この征討に参加したかどうかが、その後の各人の運命に大きくかかわることになる。なぜなら間もなく華北は東西両魏政権によって二分され、それが同郷者・肉親の間を引き裂くことになるからである。

ことに従軍者の留守家族は、北周＝北斉の時代になって

も、北斉の首都鄴に抑留されたままであった。北周の実権者宇文護（泰の甥）は、母の閻氏（閻姫）や親戚の消息を探らせていたが一向に手がかりがなかった。しかし保定四年（五六四）に至って、北斉側は護の母方のおばに当る楊氏を送還してきた。突厥の支援を得て一挙に北斉を攻略しようとする北周の鋭鋒をかわすためである。このとき北斉側は閻氏の護にあてた手紙を送っている。北斉側としては閻氏はそのまま抑留して将来の外交に利用しようとしたのである。宇文護は母へ返書を送り、母子の間に何度も書簡が往復されたが、閻氏はなおとどめられたままであった。周朝が斉に向って閻氏の送還を強く要求しようとした矢先、閻氏が長安に送りとどけられた。保定四年（五六四）九月のことである。

閻氏から護にあてた手紙は、閻氏の自筆でなく、北斉側が人に作らせたのだというが、しかしその内容は閻氏の口述によるものであろう。外交上の取引きに利用するためには、かえって内容の正確を期さねばならないからである。そこには、動乱のなかを生きてきた宇文氏一家の命運が、女性らしい語り口で、簡潔ながら述べられている。その内容は以下の行論にも関わるところが少くないので、『周書』一一晋蕩公護伝の記載によりその主要な部分を左に紹介しておきたい。

(iii) 閻氏の手紙

――母と子が幾山河をへだてて別れわかれに住むようになってから、もう三十年以上になります。生きているのかどうかも分らず、それをおもえばつらく胸が痛んで、どうすることもできません。そなたがどんなに悲しんでいるかとおもうと、居ても立ってもおられません。わたしはたしか十九の年にそなたの家に嫁に来たとおもいますが、もう八十才になりました。早くから戦争にあい、つぶさに苦労をなめてきました。いつもそなたたちが大きくなって、一日でもよいから安楽にしてみたいと願っていましたのに、何の因果でしょう、生きるも死ぬも離れればなれでなければならぬとは。わたしはそなたたち三人の息子と三人の娘[13]を生んだのに、いまは誰ひとり傍にはおりません。このことをおもうと、悲しみでからだがしめつけられるようです。斉朝のお国のおかげで、老後は安穏に暮しています。また、そなたの楊姑（おば）さんや紇干叔母さんやそなたの嫂の劉氏、そなたの嫁など[14]と一緒に暮していますので、結構たのしいですよ。ただ耳が少し悪いので、大きな声でないと聞えません。動作や飲食にはおかげで大した不自由はありません……

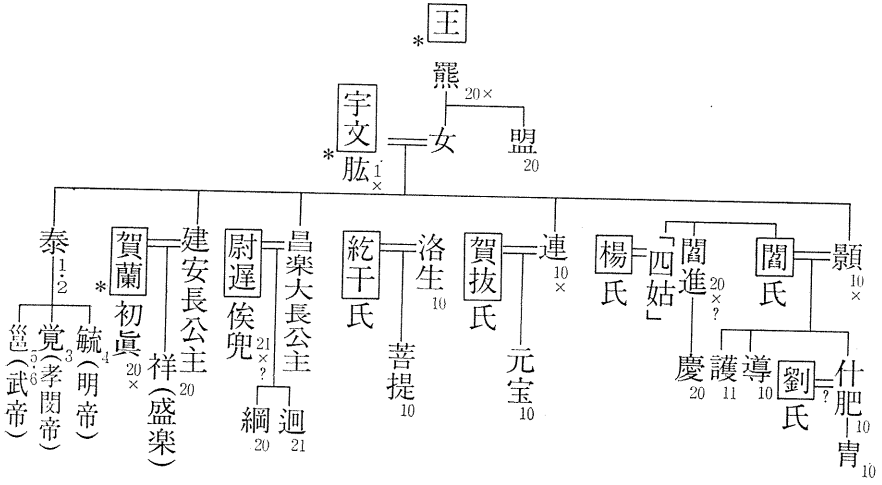
――そなたと別れた時、そなたはまだ小さかったから、昔の

家のことはあまりよく覚えていないでしょう。そなたたち兄弟は武川鎮で生れました。長男は子の年、次男は卯の年、そなたは巳年の生れでした。[15]鮮于修礼が挙兵した日、わが家の家族はそろって博陵郡（定州）に住んでいました。みんなで左人城（唐県西北）へゆきましたが、唐河の北まで行ったところで、定州の官軍にやられました。そなたのお祖父さん（宇文胤）と叔父さん（宇文連）は、その折に戦死なさったのです。[16]そなたの賀拔叔母さんと子供の元宝、[17]同じく紇干叔母さんと子供の菩提、[18]そしてわたしとそなた、この六人が一緒につかまって、定州城内に連れて行かれました。しばらくしてわたしとそなたは元宝掌[19]のところに送られました。賀拔や紇干の方も、バラバラになりました。宝掌はそなたを見て言いました。「わしはこの子の祖父を知っているが、顔つきがそっくりだ」。当時、宝掌の兵営は唐城[20]の中にありました。三日たって、宝掌はとらえた男女六、七十人ばかり[21]を都に送りました。わたしとそなたも連れてゆかれることになりました。定州城の南まで行って、夜になって同郷の姫庫根[22]の家に泊りました。すると柔然人の召使（奴）が遠くの鮮于修礼の軍営の明りを見て、わたしに言いました。「あっしがこれからわが軍まで走って行ってきます」。そして軍営までたどりついて、わたしたちがここにいることを告げたのでした。翌朝日が昇ること[23]ろ、そなたの叔父さんが兵隊をひきつれて、取り返しに来てくれたので、わたしとそなたたちとはまた軍営に帰ることができたのです。そなたはその時十二才で、[24]わたしと一緒に馬に乗って軍と行動を共にしていたのですから、この事件のいきさつはきっと覚えているでしょう。後にわたしはそなたと一緒に受陽[25]に住みました。当時は、元宝、菩提、そなたの姑（おば）さんの息子の賀蘭盛洛、[26]それにそなたの四人が、机を並べて勉強していました。先生は成といって、厳しく意地の悪い人だったので、そなたたち四人は相談して先生に悪さをしようとしました。わたしはそなたの叔母さんたちとそのことを聞いて、めいめい自分の子供を叩きました。しかし盛洛だけは母親がいないので、打たれずに済みました。その後、爾朱栄天柱大将軍が亡くなられた歳でしたが、[27]賀拔阿斗泥（岳）が関西から人を遣わして家族を迎えに来させました。その時そなたの叔父さんも召使（奴）[28]の来富をよこしてそなたや盛洛たちを呼び寄せなさったのです。その時のそなたは緋色の綾の袍（うわぎ）に銀飾りの帯をしめ、盛洛は紫の織成に繖（しぼり）の入った通身袍（上下一つづきの服

か）に黄色の綾の襦袢を着けていました。二人は一緒に騾馬に乗って行きました。盛洛はそなたより小さく、そなたたち三人はみなわたしのことを阿摩敦とよんでいました。こうしたことは、きっとはっきりと覚えているでしょう。今度またそなたが小さい時に着た錦の袍（うわぎ）一着を送ります。到着したらよく手に取って見て、わたしの長い年月の悲しみを知ってください……

この手紙によって、宇文氏を中心とする武川鎮各家の通婚関係が、かなりの程度明らかになる。これに他の史料も加えて、宇文氏内外のつながりを図示すれば、およそ下掲のようになるであろう。

北鎮の各家が避難南下するさいの集団の状況がこれによって、幾分明らかとなる。宇文氏の場合、宇文肱を中心にその四人の息子と妻子、それに夫を亡なった宇文氏の娘たちが子供を連れて実家に身を寄せていた。またそこには幾人かの召使（奴）が隷属していた。他氏の場合もおそらく似たようなものであったであろう。このような家族の各集団が、一旦武川鎮を出てそれぞれのコースをたどり、それが再び爾朱氏のもとで合流したのである。



数字は　『周書』の所伝巻数を示す。
＊印は　武川鎮出身者たることが明かな者。
×印は　賀拔岳・宇文泰の西征以前に死亡した者。

(iv) 宇文泰の擁立

爾朱氏による河北平定は、内乱を大きく鎮静に向わせたが、しかしその爾朱氏の勢威を以てしても容易に圧服しがたい幾つかの勢力がなお存在していた。ひとつは北魏洛陽政権であり、いまひとつは関隴方面の反乱勢力である。王朝としての正統性を誇る洛陽政府はまた、その背後に荆州を中心とする地方を保有しており、南朝梁との関係もからんで、爾朱氏にとってはかなり複雑でくみしがたい勢力である。当時最大の実力者であった爾朱栄が入朝して、孝荘帝とその朝臣によって殺害されるという事件を惹起したのも、こうした両者の力関係を反映している。また、その後における孝武帝と高歓の対立も、同じ根から生れたものであろう。[29] そしてこのとき孝武帝はすでに関中にあった賀拔岳に依存すると同時に、兄の勝を都督三荆二郢南襄南雍七州諸軍事・荆州刺史に任じて、南方を固めている。

つぎに関隴地方について言えば、六鎮の反乱がこの地方にも波及して、各地に暴動が発生した。その各勢力のなかで最大の勢力となったのが、高平に拠る万俟醜奴であった。醜奴は北魏政府が派遣した討伐軍司令官蕭宝夤の軍をも巻きこみ、ついに天子を自称し、百官を置くに至った。河北を平定した爾朱栄は、五三〇年、一族の爾朱天光を派遣し、賀拔岳と侯莫陳悦とを副将（それぞれ左廂大都督・右廂大都督）としてこれを討たせた。当時万俟醜奴は岐州にまで攻めよせていたが、西征軍はこれを撃退してゆき、ついに醜奴を擒にした。ついで隴山一帯の余党も平定することに成功したので、関隴一円は爾朱氏の掌中に入ったのである。

しかし同年爾朱栄が誅され、高歓が後門の狼として爾朱一族をおびやかす形勢となった。天光は関隴の占領地域を放棄して高歓との決戦に臨んだが、[30] 一族と共に高歓のために撃滅された。関隴地方は賀拔岳と侯莫陳悦の二将の手に掌握されることになった。

さきにも述べたように、覇者と朝廷との対抗関係は、爾朱氏対洛陽朝廷から高歓対朝廷のそれに転化した。ここで双方がそれぞれ関隴軍を味方に引き入れようとするのは当然である。爾朱氏に擁立された節閔帝のとき、すでに事態を見越した洛陽政府は、賀拔岳に岐華秦雍諸軍事・関西大行台・雍州牧を授けている。そしていざという時には天子は入関してここに避難する計画であったが、節閔帝はそれを果すことができず、高歓の廃弑に遇ったのである。[31]

ついで高歓によって奉戴された孝武帝もまた、推立者との

間に緊張関係を生んだ。側近の斛斯椿・南陽王元宝炬・元毗・王思政らは帝に勧めて禁軍の増強を図り、高歓との武力対決に出るが、その一方で帝は王思政らを関中に派遣して賀拔岳と結ぶと共に、賀拔勝を荆州に配置したのであった。

五三四年、侯莫陳悦の賀拔岳殺害事件が発生したのは、このような情勢の中においてであった。はじめ高歓は爾朱氏を滅すと、賀拔岳を東方に召還しようとしたが、岳はこれに応じなかった。高歓と結んだ悦の賀拔岳殺害は、関隴地方に対する高歓の野心——それは洛陽政府翻覆の意志と根柢を一にしている——が前提になっている。[32] しかしその後の事態は、かれの意向どおりには進展しなかった。

侯莫陳悦が賀拔岳を誘殺した直後、統率者を失なった岳の部下たちは、三々五々平涼に帰還した。[33] 悦はこのときかれらを慰撫・懐柔すべきであったのにもかかわらず、自分の麾下のみを率いて水洛城に引き揚げてしまったのである。平涼に帰った岳の旧軍は、最年長の寇洛（武川鎮出身）を統帥として態勢をととのえようとしたが、洛はその器でないとして辞退した。そのうえ部隊は今後の去就について幾つかの意見に分れた。曰く、荆州の賀拔勝に入関を要請してその指揮下に入るべし。曰く、洛陽の朝廷に事態を報告して指示を仰ぐべし。これまで見て来たとおり、この二つの意見は、当時の政治の形勢をよく反映している。これらに対して、趙貴（武川鎮出身）は、夏州刺史として任地にある宇文泰を迎えるべきだと主張した。趙貴はさきに侯莫陳悦に請うて上司賀拔岳の遺骸を埋葬した人である。赫連達も趙貴の意見に賛成した。朝廷や賀拔勝がいかにたよるべき権威であるとしても、いまの切迫した事態からすれば遠方すぎて間に合わぬ、というのである。宇文泰はかねてから賀拔岳の信任を受けてはいたが、当時まだ二十八歳で、諸将の上に十分な指導性を有していたわけではなかった。しかし事態が切迫していたために部隊がこの若く英明な武将を司令官に選んだことは、関隴地方がこの軍を中心として政治的自立をとげてゆくのに、大きなプラスとなったのである。

さて、旧賀拔軍の要請に対し、夏州の宇文泰の側でも種々討議が重ねられたが、結局泰はこの要請を受諾して平涼に赴き、軍の推戴を受けた。やがて泰は侯莫陳悦を牽屯山に追いつめて滅ぼし、高歓の干渉を排しつつ、関隴地方におけるヘゲモニーを確立して行った。

(v) 関中政権の成立

北魏朝廷は、当然のことながら、宇文泰のひきいる関隴軍を自分の許に引き寄せようとした。孝武帝ははじめ宇文泰を大都督に任命して岳の部隊を統率することを承認し、かつ対高歓戦にそなえて、入洛を命じた。しかし泰は、侯莫陳悦と高歓と敵を腹背に受けていることを理由に、関隴から動こうとしなかった。[34] 高歓と朝廷との間がいよいよ緊迫すると、朝廷は泰を関西大行台に任じ、泰の方でも東方に出兵して、高歓の洛陽進攻に牽制を加えた。孝武帝はついに倉卒として洛陽を脱出し、入関して宇文泰のもとに身を寄せた。[35] かくて宇文泰は帝を奉じて長安に都し、その覇権の下に西魏王朝が発足するのである。それは、宇文泰のひきいる関隴軍の政治的自立を告げるものであった。

洛陽南方にあった賀拔勝の勢力は、この事態にどう対応したであろうか。賀拔岳が殺害されたとき、その左廂大都督であった李虎（唐高祖李淵の祖父、武川鎮出身）は急遽賀拔勝のもとに赴き、岳の余衆を掌握するよう要請しているが、勝はこれに従わなかった。そして部下の独孤信（武川鎮出身）のみを派遣している。しかし独孤信が平涼に到着したとき、軍はすでに宇文泰の指麾下にあった。このように、賀拔勝は時局の展開に一歩立ちおくれる傾向にあった。高歓と朝廷との緊張関係が高まると、朝廷は勝に軍を率いて入洛するよう命じたが、勝は広州まで来ると、進軍をためらった。そのうちに孝武帝が西遷したので、勝も関中に赴いたが、高歓に華陰を制扼された。属僚の崔謙が、ぜひともこの機会に入関しなければ取り返しのつかないことになると進撃策を主張したが、勝は軍を返して本拠の荆州に帰還してしまったのである。その上東魏の侯景に大敗し、麾下数百騎と共に梁に亡命した。勝が長安に入ったのは、その約三年後であった。かれは朝廷に罪を謝したが、朝廷はこれを赦し、太師を授けた。しかしそれはいわば名誉職であって、現実にはかれが宇文泰の下風に立たざるを得なかったのは、いうまでもない。[36]

以上の経過から明らかなように、西魏政権の中核を形成したのは、宇文泰のひきいる関隴軍であった。言いかえれば、旧賀拔軍が仲間の宇文泰を推戴していわば自立軍となったとき、関隴政権の第一歩が印せられたのである。この事件は、その後の周・隋・唐諸政権にとっても、大きな意義をもつものであろう。

(vi) 賀拔岳の西征軍と武川鎮グループ

さて、司令官を失なって一時去就に迷った旧賀拔軍が、以上のようにして意志決定を行なってゆくとき、そこに一定の傾向が表われているようにおもわれる。たとえば、まず最年長という理由で司令官に推戴された寇洛は武川鎮出身者である。かれが固辞したのちに軍中より提起された三案のうち二案は、これも武川鎮出身の賀拔勝もしくは宇文泰を推戴するプランである。そのプランの提出者は、宇文泰案の場合は武川鎮出身の趙貴であり、賀拔勝案については不明であるが、その出馬を要請すべく荆州まで赴いた李虎の意見が何らかの形で関わっていると見られる。そして李虎もまた武川鎮の出身とされる。このように見てくると、旧賀拔軍の意志決定には、武川鎮出身者の意向が積極的な役割を果しており、その結果、大勢は宇文泰推立へ落ち着いたと見られるのである。

それでは、旧賀拔軍のなかに、武川鎮出身者はどのような位置を占めていたのであろうか。いうまでもなく旧賀拔軍はかれらのみで構成されていたわけではない。他の北方州鎮の出身者や関隴土着の人びとをも含んでいたのであった。[37] それにもかかわらず、軍の意志がその意向に大きく左右されたのは、かれらが軍中に枢要な位置を占めていたためであろう。そこで試みに、旧賀拔軍の構成を出来るかぎり復原してみると、つぎのような結果を得るのである。

関西大行台関係

左　丞　宇文泰*　のち蘇亮
右　丞　薛孝通
従事中郎　周恵達
吏部郎中　辛慶之
郎　中　王子直　呂思礼◎[38]

都督府関係

長　史　雷紹*◎　のち趙善*◎
司　馬　宇文泰*
従事中郎　馮景
記室参軍　張軌

軍関係

左廂大都督　李虎*
右　都　督　寇洛*◎
大　都　督　趙貴*◎　劉亮◎
都　督　侯莫陳崇*◎　若干恵*◎　怡峯◎　赫連達◎　辛威　梁椿
子　都　督　達奚武◎　韓果*

帳内都督　李和
別　将　王勇*
帳　内　耿豪[39]
「心　膂」　梁台◎
不　明　侯植　厙狄昌◎　梁禦*◎　王徳*◎

* 武川鎮出身者
◎ 宇文泰推立に賛同したことが明記されるもの。

以上に掲げた官職名は主として『周書』に載せる表現をそのまま取ったもので必ずしも正確な官職名ではないが、ここから大体の構成を見ることができるであろう。これによれば、大行台、都督府ともに最高首脳部はおおむね武川鎮出身者によって占められる傾向にあった。そのほかに文官系の属僚があったが、とくに大行台関係では、関隴出身の名族をこれに任じているのが特徴的である（蘇、辛、王）。また軍関係についていえば、李虎が左廂大都督であった以上、右廂大都督に任ぜられた部将もあったと推定されるが、さらに推測を逞しうすれば、「右都督」と記された寇洛をこれに比定できるのではなかろうか。とすれば、賀拔岳のもとには李虎と寇洛の左右副将があったわけであり、軍首脳は完全に武川鎮出身者によって占められていたことになる。その他の部将たちの顔触れを見ても、同鎮出身者が将星の半数を占めている。このような構成上の特色をもつ旧賀拔軍が、武川鎮出身者のなかから指導者を選ぼうとするのは、理の当然であろう。そして李虎を除く主だった将吏のほとんどが、結局宇文泰推立に賛同したのであった。そのときこの最終的な意志決定に賛同したことは、その後のかれらの閲歴に大きく関わることになったのであろう。右に◎印を付した各人の本伝には、「同謀翊戴太祖（宇文泰）」ないしはこれに類似した表現で、そのことを明記している。

以上のように、旧賀拔軍が宇文泰推立に意志を結集して関隴地方に自立してゆくのには、それに見合う軍府の構成があった。そしてこのような構成は、賀拔岳が爾朱天光の左廂大都督として西征したさい、すでに形をなしていたと考えられる。はじめ爾朱栄が関隴派遣軍の最高司令官として任命したのは、賀拔岳その人であった。しかし征討に失敗して罪されることをおそれた岳は、兄の勝と相談して、爾朱氏一族のなかから最高司令官を要請し、自らはその副将の位置にとどまった。このようにして出発した西征軍の兵力は、最初わずか千人であった。その後、現地より徴発し、また爾朱栄のもとから二千人を増援されたが、それでも兵力不足は免れなかっ

た。軍の進撃は停頓しがちで、天光は爾朱栄の杖罰を受けたほどであった。このときその前軍となって、岐州まで侵攻していた万俟醜奴に一撃を加えたのが、賀拔岳の部隊であった。その兵力はわずか一千である。その一千の兵力も天光から分給された兵士を交えていたとおもわれるので、岳が西征のはじめに率いた手兵の勢力は、決して大きくはなかったはずである。しかしそのさして多からぬ手兵のなかに、武川鎮出身の将兵があった。前述したように、爾朱栄のもとにあった武川鎮出身者たちは、このとき家族を残して西征の途につくのであるが、かれらが賀拔岳を中心として部隊を結成したその人的つながりは、やはり同郷関係にあったとおもわれる。たとえば寇洛は、北鎮の乱に「郷親」を率いて南下し、爾朱氏のもとに入った人であるが、同郷の賀拔岳が西征するというので、「募従入関」したのであった（『周書』一五本伝）。

武川鎮軍閥とよぶべきものが、旧賀拔軍の宇文泰推戴の時点で自立の第一歩を印したとすれば、それより以前、賀拔岳の西征は、武川鎮軍閥形成の契機をなすものであった。さらに、そうした内部結合の糸をたぐってゆくと、郷里武川鎮にまで到達する。次節では、この同郷関係の実態について考察したい。

三　武川鎮社会と武川鎮軍閥

(i)　「郷里」武川鎮の意味

郷里武川鎮を離れざるを得なかった同地の出身者たちは、内乱のさなか、官軍、あるいは反乱軍、あるいは爾朱氏というように、有力勢力のもとを転々とし、それらに依存しつつ、新たな立身のチャンスを求めてゆかねばならなかった。そうした流寓生活において、血縁や地縁のつながりが大きな意味をもっていたことはいうまでもないであろう。

先述したように、寇洛は賀拔岳との同郷関係によって、その西征に「募従」し、岳の右廂大都督をつとめた。また岳が殺害されたさい、賀拔勝は独孤信を関中に派遣したが、そのときすでに事態を収拾していた宇文泰は、同郷で幼馴染の信と会ったことを大いに喜び、かれを洛陽への使節として派遣している。[40] これらの事例はいずれも史書に、「甲与乙郷里」といった表現で、甲乙両者の同郷関係を書きあらわしている。これらの場合の「郷里」とはいうまでもなく武川鎮を指している。武川鎮とはもともと北魏が対北方軍事施設として設置したもので、そこに所属する人びとは、多く他所からの

徙民である。たとえば賀拔氏はもと神武・尖山の人で、岳らの祖父のとき「良家子を以て武川に鎮」することになり、以来そこに住みついたのである。一方、寇氏は洛の父のとき上谷・昌平から徙り住んだもの、宇文氏と独孤氏も、たがいに出自を異にしつつ、同じく武川鎮民として定住したものである。武川鎮はそのような他所者の集りの場所であるにもかかわらず、なぜ「郷里」なのか。このような問題に着眼しつつ、北鎮社会の実態に迫ろうとしたのが、直江直子「北朝後期政権為政者グループの出身について」（本誌五号）である。

直江氏は、布目潮渢氏が隋唐帝国建設に果した北族の役割を重視していることに賛意を表しつつも、氏がそれを中国史の進展に対し外的要因と見ていることに疑問を呈した。たとえば「関隴集団」形成時の北族出身者を単なる外的要因とみなすならば、北魏帝国一五〇年の歴史は一体いかなる意味をもつかという疑問である。また直江氏は、わたくしが隋唐帝国の起源を漢族と北族のそれぞれの共同体に求めたことを取り上げ、漢族のそれ（豪族共同体）については北朝後期の郷兵集団として具体化されているが、北族については部族共同体を源流とすると述べるだけで、その共同体の発展のすがたを示していないと指摘した。このようにして、氏は、北族社会そのものの歴史的発展のあり方を北鎮のなかに求めようと試みる。氏によれば、東西両魏ひいては北斉・北周政権をになった人びとは多く北鎮出身者である。しかしかれらが集団を形成して、将来の権力者として成長していった拠りどころは、北魏の軍政統治機構としての鎮の組織にはなかった。それとは別に、かれらが「豪傑」として民衆の敬慕を受けつつ指導力を発揮していたところの地域社会こそが、かれらの基盤であった。その地域社会は史書に「郷里」「州里」などの語で表現されるが、しかしそれは「豪傑」たちの本貫ではない。かれらの先祖はそれぞれ部族の酋帥であったが、北魏の国防政策のために、ある時期に、「良家子」という認定を受けて北鎮に徙されたものである。つまり北鎮はかれらにとっていわば第二の故郷であり、かれらはこの徙住地に新しい地域社会を形成した。そうした社会の秩序は決して国家から与えられたものでなく、また部族共同体のジッテそのものでもなく、「豪傑」と民衆の指導被指導関係が作り出した新しい自律的秩序である。「郷里」「州里」という表現は、こうした内容を含んでいる。およそ以上のように述べたのち、氏はつぎの点を指摘する。北鎮「郷里」社会がこうした構造を具えているとするならば、それは、郷兵集団の基盤をなした漢人

豪族共同体ときわめて類似している。東西両魏政権において、北鎮出身者を主とする北人集団が漢族の郷兵集団を包摂して政権を確立し得たのも、前者の武力の強大さにあるのではなく、集団形成の形態が同質であり、その基盤となった社会に共通性があったためではなかったかと。

氏の所論は大局において妥当な意見というべきであろう。ことに右に紹介した最後の部分は、北朝後期～隋唐の諸国家の構造と性格にかかわる重要な提言である。なぜなら、この考えをつきつめてゆくならば、それらの国家は結局のところ、胡漢にかかわらず豪傑（族）―郷民の指導被指導関係に貫かれる諸集団の統合形式である、という結論にみちびかれる。言いかえれば、隋唐帝国とは決して単なる北族に支えられる武力支配の国家ではなく、その歴史的本質において豪族階級に支えられる国家だということになるからである。

以上は直江氏の考察をいささか自分の関心にひきつけて整理した結果であるが、氏自身も述べているように、それでは北鎮社会を中国内地の社会から区別すべきものはないのであろうか、もしあるとすればそれは何かという諸点が、なお問題として残るであろう。とくに国家形成の観点からすれば、それでは何故に北鎮出身者が当時の政権形成にイニシアティーヴを握ったのかという問題がある。さらにいえば、そこから北族武力国家論――それ自体としては通俗的な議論にすぎないが――が復活してくる余地がある。このような課題を念頭に置きつつ、以下に私見を述べてみたい。

(ii) 武川鎮社会の構造

北鎮の「郷里」社会が部族制社会そのものでなく、淵源の一つをそこにもちつつも、それとは性質を異にする社会であったことは、直江氏の指摘するとおりである。従来明らかにされているように、北鎮には北族系のみならず、漢族系の人びとも徙遷されて居住した。そこはまた、内地から送られた犯罪者の配流の地でもあった。命知らずの高車人騎兵、あるいはおそらく商人たちも、北鎮の構成要素であった。[41] このような雑多な鎮民を、中央から派遣された鎮将以下文武の将吏が支配していた。北鎮は北辺の町であったけれども、一面では北魏国家の縮図であった。とすれば、ここに定住する北族系鎮民がいつまでも部族制の原理に生きていたわけではないであろう。六鎮反乱の討伐軍司令官であった広陽王元淵の上奏文に、鎮民たちが洛陽の同族たちと登官のチャンスにおいて大きな差別を受けていることを指摘しているのは、[42] 部族制

社会が北魏官僚制国家によって拡散させられてきたことの証左であろう。そして、その官僚制国家の帰結は、孝文帝の政策によって制度的完成を見た貴族制国家であった。

こうして、北族出身者もまた漢人貴族的教養を身につけなければならない。つまりかれらにも学問の必要な時代となったのである。さきの元淵の上奏の一節に、鎮民はその居住区から自由に離れることが禁じられているため、若い世代は師に就いて学ぶことができず、壮年は官界に遊ぶことができないというかれらの苦境を述べているが[43]、北魏末期には、北族系鎮民の子弟にも、武勇一辺倒でなく、一方で教育を受けさせる必要が生れていたのではなかろうか。

このような時代の空気を反映してか、武川鎮出身者のなかにも、ある程度の学問を身につけた例が見られる。たとえば、賀拔岳は若い頃太学生となっている(『魏書』八〇・『周書』一四各本伝)。また賀拔氏や宇文氏と同盟して衛可孤を襲撃した念賢は、児童の時学校で勉強し、経史に通じたといわれ(『周書』一四本伝)、侯莫陳崇の弟凱も、「頗る経史を好み」、西魏の大統元年には東宮侍書となっている(『周書』一六本伝)。先掲の閻氏の手紙によれば、宇文氏やその姻戚の家では、流寓のさなかに於てさえ、師を招いて子弟に教育を施しているのである[44]。宇文泰自身が学問を好み、関西大行台のなかに学校を設け、自らも加わって経書を学んでいるが、如上の空気からすれば、それも決して特異なことではない[45]。北族の漢化傾向は、やはり時の必然として、抗いがたく進行していたのである。

しかしそうした一面の傾向にもかかわらず、武川鎮の「豪傑」たちはすぐれて武人的であり、北鎮一帯におけるかれらの名声は、もっぱらその点に基づいている。たとえば、「北辺其の胆略を推さざるは莫し」(賀拔勝)、「左右馳射を能くし、驍果絶人、兵書を読まずして暗に之と合す。識者咸な之を異とす」(賀拔岳)、「陵、系を生み、系、韜を生み、韜、皇考肱を生む。竝びに武略を以て称せらる」(宇文氏)、「少くして雄豪、節義有り、北州咸く之に敬服す」(独孤信の父庫者)など、枚挙にいとまがない。中国内地の漢人豪族がどちらかと言えば学問・教養を以て自立していたのと、これはかなりの隔りがある[46]。豪俠的性格という点では共通するところもあるが、この武と文の相違はやはり看過できないであろう。そしてその淵源を遡るならば、勇武と公平を資格とする北族部落酋帥の人格にまで行き着くであろう[47]。換言すれば、かれらのこうした人格が用いられて、北鎮に配備されたのである。

その際、これら旧酋帥層がどの程度の部族員を率いて鎮に定着したのかは詳らかでない。しかしその後の北鎮社会に、「豪傑」と民衆とのある種の支配関係が存在したことはたしかであろう。直江氏が指摘しているように、賀拔度拔と宇文肱があい謀って、「州里の豪傑」輿・念・乙弗・尉遲の各氏と共に「義勇」を招き、衛可孤を襲殺した事件における「豪傑」と「義勇」との関係がその反映であると考えてさしつかえないであろう。

「豪傑」―「義勇」の関係がある意味でタテの構造であるとすれば、[48] 武川鎮「郷里」社会はまた、「豪傑」各家のヨコの関係で結ばれていた。その結びつきの一つは、いうまでもなく通婚関係である。前掲の宇文氏系図に例を取れば、宇文氏における通婚の相手方となっているのは、王・閻・賀拔・紇干・尉遲・賀蘭・劉の各氏であり、楊氏とは間接的に姻戚関係にある。このうち王・賀拔（度拔の一族であるとして）・賀蘭の三氏はいずれも名族の出身で、「良家子を以て」ある時期に武川鎮に徙り、ここに定住したものである。[49]

宇文氏の通婚範囲は必ずしも武川鎮内にとどまるものではない。閻氏は河南・河陰の人というが、宇文顥の妻閻氏の曽祖善が雲州鎮将となって以来雲州の盛楽（すなわち雲中）に定住した。雲中は武川鎮に隣接する鎮である。しかも閻氏はこの地の「豪傑」であったらしく、武川・懐朔を攻囲した衛可孤が盛楽（雲中）にも来攻すると、閻進とその子の慶は「衆を率いて拒守し」、三年の間よく持ちこたえたので、盛楽郡守を授けられている。つまりこの時期、宇文氏と閻氏の姻戚同士はそれぞれ武川と雲中において、衛可孤との闘いを戦っていたわけである（『周書』二〇閻慶伝）。

劉氏と楊氏について、詳細は不明であるが、賀拔岳の都督として西征し、のち宇文泰の部将として活躍して重用された者に劉亮なる人物があり、中山の人というが、父持真（『北史』は特真に作る）が鎮遠将軍・領民酋長であったところからすれば、北辺に居住した北族系かともおもわれる。しかしこの劉亮が宇文氏の姻戚であったという証拠はない。また楊氏についても、これが楊忠（高祖元寿のとき武川鎮司馬となり、以後神武・樹頽に定住したといわれる）の同族であったという明証はない。

以上検討してきたところからすれば、宇文氏の通婚範囲は、武川鎮を中心としてその近隣の地方ということになるであろうか。そしてその通婚対象が北鎮地帯に住む北族の、もしくは北族化した、「豪傑」層であったことも、ほぼ疑いな

いとおもわれる。

いま宇文氏に例を取ったが、他の「豪傑」の家についても、同じようなことが言えるであろう。衛可孤襲殺に加わった武川鎮の「豪傑」念賢の妹が神武・尖山（懐朔鎮管内）の侯淵に嫁しているのが、その具体例である（『魏書』八〇侯淵伝）。こうして見ると、北鎮地帯の「豪傑」各家は、自己の居住する鎮を中心にたがいに通婚の網の目を張りめぐらせていたと考えられる。武川鎮軍閥が西魏以後唐代に至るまで、一大閥閥の観を呈するのも、その淵源はすでに北鎮時代にあったのである。

通婚に次いで、交友関係もまた人と人、家と家とを結びつける契機である。前述したように、宇文泰は同郷の独孤信と幼馴染であったが、独孤氏もまた部落大人の後裔で、信の祖父侯尼のとき雲中から武川に移り住んだものである。父の庫者は領民酋長をつとめ、雄豪・節義をもって北方一帯に知られた。信は、先述のように、賀拔・宇文両氏の主謀による衛可孤襲殺に参加して、名を知られるようになった。[50] まさに典型的な武川鎮の「豪傑」である。そしてこのような「豪傑」の家に共通する家風には、勇武のほかに気節がある。独孤庫者がそのような人格の持主であったが、賀拔岳についても「愛施好士」といわれ、同じ武川鎮の趙貴も、「少くして頴悟、節概有り」と記されている。この点は宇文氏も同様であった。宇文肱は「任侠にして気幹有る」人物であり、その第三子洛生も、「少くして任侠、武芸を尚ぶ。壮なるに及んで施を好み士を愛す。北州の賢俊、皆な之と遊ぶも、才能は多く其の下に出づ」とある。そしてその弟泰も、「少くして大度有り、家人の生業を事とせず、軽財好施、以て賢士大夫と交結す」という任侠的人格の持主であった。[51] かれらのこうした性格と行動は、一般民衆の人望を獲得すると共に、「豪傑」間のヨコの結合をつくり出す契機となったにちがいない。宇文泰と独孤信の交友関係の背後に、このような北鎮社会の交友情況を想像することができる。

さて、通婚と交友を軸として形成された鎮内の人的結合関係は、直江氏がいうように、たしかに自律的な社会秩序を形づくる。その限りにおいては中国内地の豪族社会とも変りがない。胡漢の種族的区別をこえて、当時の華北社会がこのような豪族（豪傑）の人格的影響力のもとにあったという確認は重要である。しかしそうした前提に立った上で、北鎮には、ある種の特異性が感じられないであろうか。それは北鎮社会の居住空間がきわめて限定されている点である。各鎮は、陰

山山系に発する河水を利用して立地されたとおもわれるが、しかしそれによって営まれる集落は、位置的にも面積的にも、おのずから限度がある。加えて、北方遊牧民族の脅威に日常的にさらされている。むしろその侵攻から国土を防衛することが、鎮の任務である。このような自然的人文的条件は、鎮の集落形態を極度に集約的、凝縮的なものにせざるをえないであろう。それはきわめて都市的であり、人びとの居住区は、広大な内モンゴル高原に、稀小な点として散在している。そこに住む鎮民たちが、城民の語でよばれるのも、ゆえなしとしないのである。

北鎮はこのような居住空間に、来歴を異にする人びとを投充して人為的に作られた。[52] したがって、名誉ある出自をもった「豪傑」の各家も、この限定された空間のなかに密生的に存在し、かつそれら同士の関係は基本的に対等である。もっとも、鎮内のこうした関係は、隣鎮にまで拡延されることがあり得る。鎮と鎮との間に横たわる数十里の距離は、騎馬になれたかれらには、大した行程ではなかったはずである。こうした北鎮間の交流が本鎮を超えた通婚関係や交友関係を生み、あるいは北鎮一帯に勇名を馳せるということにもなるのであろう。

さて、このような「豪傑」の家は、本来軍事によって国家に仕え、それによって自家の栄達をはかろうとする存在である。北魏帝国の栄光と自家の顕達とは、かれらにとって同じ次元のものであり、[53] そうした意味で、「豪傑」各家はそれ自身政治的存在であった。中国内地の豪族階級が王朝権力から多かれ少かれ超越的であったのと、やや異なる。このような北鎮「豪傑」各家の交流は、日常に濃厚な政治意識を伴なっていたのではなかったであろうか。ことに、北鎮が洛陽政府から疎外と蔑視を受けるようになって以来、その政治的エネルギーは、急速に反中央的色彩を帯びたと想像される。

要するに、北鎮「豪傑」各家は、血縁的地縁的関係を基礎に、ある種の仲間社会を形づくり、それが潜在的な政治的軍事的な組織をなしていたと考えて差支えないであろう。その機縁は、鎮という軍事機構によって与えられたものである。しかしそれは単なる官僚機構の枠をこえ、「豪傑」という表現にふさわしく、支える者の自律性にもとづくものであった。この潜在的政治組織、軍事組織は、鎮の反乱を契機に顕在化した。この顕在化がもっとも際立って行われたのが、武川鎮である。[54] そして、その最初の共同行動が、かの衛可孤襲殺であった。

いうまでもなく、かれらは、官軍としてそれを行ったのではない。それはきわめて自発的な軍事行動であった。その立場は、あえて言うならば、中央政府追随でもなければ北魏否定でもない、[55]第三の立場であろう。「豪傑」層は、中央の門閥官僚からは一線を画されているが、さりとて一介の民衆でもない。現地おいて民衆に影響力を及ぼし、これを支配し、中央の頽廃を強く批判する存在である。かれらはまた、単なる勇士ではなく、学問・教養にもいくらかの理解をもつ。本来北族であっても漢化の影響を受けており、一方漢族の出自であっても北方の風気に染っている。このように、さまざまの対極的要素を備えたかれらは、一方に精神の質実さを失っていないと同時に、他方では文明社会への広い視野を身につけている。すなわち、頽廃した現政権を超克して、新たなる政治世界を打ち樹てるべき資質を有する階層であった。

(iii) 武川鎮グループと西魏二十四軍

前述したように、武川鎮の「豪傑」層は、賀拔岳の西征を契機に、軍団を構成した。同郷関係によって結ばれたこの軍団は、一種の郷兵集団とみなすことができるであろう。関隴における反乱討伐には現地豪族の組織した郷兵集団が西征軍に協力した。また西魏時代に入ると、宇文泰は積極的に郷兵集団の編成を推し進め、土地の望族に統率させた。このようにしていわゆる二十四軍が成立するが、西征部隊自身が武川鎮を郷里とする一種の郷兵集団を含んでいたとするならば、二十四軍とは結局北鎮・関隴の郷兵集団をピラミッド型に統合したものであった。西魏・北周、さらには隋・唐を軍事的に支えるものは郷兵集団であり、これらの国家は、この意味で豪族国家であったと考えることも不当ではないのである。

しかしその一方で、武川鎮の郷兵集団は、いわば特殊な郷兵集団であった。それ自体として郷兵集団であると同時に、他の地域の郷兵集団の中心位置にあって、それらを統合する役割を果した。[56]それは、二十四軍成立期の柱国—大将軍の構成にもっともよく反映されている。

	姓名	出身地	備考
柱国	宇文泰	武川鎮	
〃	李虎	〃	
〃	元欣	河南・洛陽	北魏宗室
大将軍	李弼	遼東・襄平[57]	侯莫陳悦の麾下より宇文泰に帰す

将軍	独孤信	武川鎮	賀拔勝の部下
	趙貴	〃	
	于謹	河南・洛陽	宇文泰の夏州長史
	侯莫陳崇	武川鎮	
大将軍	元贊	河南・洛陽	北魏宗室
	元育	〃	〃
	元廓	〃	〃
	宇文導	武川鎮	宇文泰の甥
	侯莫陳順	〃	侯莫陳崇の兄
	達奚武	代人	
	李遠	高平鎮	高平の郷帥
	豆盧寧	昌黎・徒何	本姓慕容氏。侯莫陳悅の麾下より宇文泰に帰す
	宇文貴	夏州	夏州の郷帥
	賀蘭祥	武川鎮	宇文泰の外甥、泰の帳下
	楊忠	神武・樹頽	独孤信の部下
	王雄	太原(58)	

＊この構成は『周書』一六、『北史』六一による。

柱国―大将軍という最高統帥の位置は出身地のみを基準として与えられたものではない。宇文泰指導下の西魏政権に対する貢献度がそれにもまして重要である。右の表では、爾朱天光の西征に従った者のほか北魏の宗室、賀拔勝の部下、関隴地方の郷帥などさまざまの系統を含んでおり、したがって武川鎮出身者のみに限定されるものではない。また、同じ武川鎮出身者のなかでも、侯莫陳兄弟のように、宇文泰推立に直接加担した弟の崇の方が、孝武帝と共に入関した兄の順よりも、高い地位を占めている。こうしたさまざまのファクターが複合されて、右の統帥組織となったのであろう。しかしそれにしても、武川鎮出身者が総計二〇名中八名(楊忠を含めれば九名)を占め、とくに八柱国の場合は五人までが武川鎮出身者であるという比率の高さは、なお看過できないものがある。武川鎮出身者が成立期における二十四軍の牢固たる中心をなしていたことは、疑いえないであろう。ところで、武川鎮「豪傑」勢力は、「豪傑」同士のヨコの構造と同時に、「豪傑」――郷民のタテの構造によって支えられていた。この点は、二十四軍の統帥系統に何らかの形跡を残しているであろうか。

西魏政権に参画した武川鎮出身者のなかで右の八柱国・十二大将軍以外に、賀拔勝・念賢(以上一四)、寇洛(一五)、梁禦・若干恵・王徳(以上一七)、王盟・尉遲綱(二〇)、尉遲迥

(二一)、韓果(二七)、王勇・宇文虬(二九)、趙善(三四)らの人びとがある(数字は『周書』本伝巻数)。このうち賀拔勝から王盟までの人びとおよび趙善は、二十四軍成立以前に死亡しているから考慮の外に置くこととして、尉遲迥兄弟と韓果・王勇・宇文虬の三人が、二十四軍のなかにどういう位置を占めていたかを考えてみたい。

本伝によれば、尉遲迥は廃帝二年(五五三)以前に大将軍に任命されているが、それが、二十四軍が創設されたとされる大統十六年(五五〇)[59]当時にまで遡ることができるかどうかは不明である。しかし先掲の将帥表にはその名がないので、おそらく開府儀同三司であったのであろう。また弟の綱は、大統十四年に儀同三司となり、俄に開府に昇進した。それは大統十七年以前のことであるから、その前年の十六年には開府であったとおもわれる。韓果については、恭帝元年(五五四)に大将軍になっているが、北周明帝の武成元年(五五九)には、賀蘭祥(当時柱国)に従って吐谷渾討伐に赴いていることからすれば、大統十六年には、賀蘭祥(当時大将軍)より一ランク下位の開府であった可能性が強い。王勇は大統十五年に開府となったことが明らかであり、宇文虬もまた、大統十六年には開府であったと推定される。このように見てくると、これら武川鎮出身者たちは、二十四軍創設当時、すべて開府儀同三司であった。すなわち、同じ武川鎮出身者でありながら、柱国や大将軍であった人びとよりも下位に位置づけられていたわけである。これはどういう理由によるものであろうか。

当時柱国・大将軍の地位に任ぜられた人びとは、さきに見たとおり、鎮の「豪傑」層であった。この点からいえば、尉遲迥・綱兄弟は、宇文泰の甥にあたり、家格としてはかれらと同等である。そのかれらが開府であったのは、おそらく若年であったためであろう。[60]これに対し、韓果、王勇、宇文虬の三将については、年令上の理由を見出すことができない。なぜならかれらは、すでに五二八―五三〇年頃から武人として活躍しているからである。一方、かれらに共通しているのは、本伝に、父祖に関する記述を欠いていることである。[61]想像の域を出ないのであるが、かれらこそ真に民衆的な存在ではなかったであろうか。そしてそのようなかれらの出自が、「豪傑」出身の武将たちとの間に、一種の階層関係を作り出していたと考えられないであろうか。しかし、そのようなかれらも、武功によって大統十六年には開府儀同三司という高い地位にあった。それは一軍の長であり、二十四開府のうち、少くとも五人までが武川鎮出身者で占められていたので

あった。このように、「郷里」武川鎮におけるタテ・ヨコの人的関係は、動乱のなかをくぐることによって、関中軍事政権の核心的構造をなしたのである。

註

(1) ただし、陳寅恪氏は、唐朝李氏の祖先が武川鎮出身であるという各史の記事を疑っている。陳氏は、河北省隆平県所在の唐光業寺碑によって李氏累代の墳墓が趙郡に近い鉅鹿郡にあったとし、そこから李氏は武川鎮出身者ではなかったと断じている(『唐代政治史述論稿』上篇)。しかし右の碑文によって、李氏の本貫が隴西でなく趙郡であったことを言うにしても、武川鎮に徙住したことまでも否定することは困難であろう。なお陳氏「李唐氏族之推測」「李唐氏族之推測後記」(『陳寅恪先生論文集』上、台北、一九七七年)にも、この問題について論じている。

(2) たとえば宮崎市定『中国史』上(岩波全書、一九七七年)二六九頁。

(3) 原文は次の通り。「蓋宇文泰当日融冶関隴胡漢民族之有武力才智者，以創覇業；而隋唐継其遺産、又拡充之。其皇室及佐命功臣大都西魏以来此関隴集団中人物；所謂八大柱国家即其代表也」。

(4) 布目潮渢氏も陳氏の「関隴集団」の語に拠って自説を述べておられるが(「隋唐史研究の歩み」『東洋史苑』一〇)、しかし布目氏はどちらかといえば北族の軍事的要素を重視しておられ(後節参照)、陳氏の「関隴集団」説に見られる複合社会論的見地とは少し距りがあるように感じられる。

(5) 一九五六年、内蒙古大青山後にある五ヶ所の古城址調査が行われたが、そのうち烏蘭察布盟武川県西南二〇余キロ(呼和浩特からは二五キロ)大青山北の土城梁村にある古城が、北魏武川鎮址ではないかと推定されている。調査によれば、城址は南城と北城とから成り、南城は東西一三〇米、南北一〇〇～九〇米、北城は東西約三〇〇米、南北約四〇〇米あって、両城は約五〇米を距てて相対している。南城内にはやや北寄りに、長さ三五米、巾三〇米、高さ七米の建築台基が残っており、北魏時代の瓦当や銅鏃、鉄犂などの遺物が散在している。南城が鎮の中心地区であろうが、北城でも同じような遺物が出土している。また、鎮城の内外には、瓦磚をしきつめた多くの木造建築物があったらしく、農具も伴出して、当時の鎮民の生活状況を推定させる。張郁「内蒙古大青山後東漢北魏古城遺址調査記」(『考古通訊』一九五八年第三期)、宿白「盛楽・平城一帯的拓跋鮮卑—北魏遺迹——鮮卑遺迹輯録之二」(『文物』一九七七年第一一期)、文物編輯委員会編『文物考古工作三十年　一九四九——一九七九』(北京、一九七九年)七六—七七頁、参照。

(6) 衛可孤はまた衛可瓌、衛可肱とも記載される。姚薇元『北朝胡姓考』(北京　一九五八年)は匈奴系ではないかとしている。

(7) なお、この共同行動に参加した者に、本文に挙げた他に独孤信がある(『周書』一六本伝)。また宇文肱の長子顥はこの戦闘で歿している(『周書』一〇邵惠公顥伝)。

(8) 「以北辺喪乱、避地中山、為葛栄所獲」(『周書』一六独孤信

伝)、「魏正光中、破六汗拔陵攻陷諸鎮、亦為其所擁、拔陵破、後流寓中山」(同上二〇王盟伝)。なお、曾祖元寿が武川鎮司馬となったため神武・樹頽(『魏書』一〇六上地形志上によれば懐朔鎮、のちの朔州管内)に定住することになった楊禎についても、「属魏末喪乱、避地中山、結義徒、以討鮮于修礼、遂死之」(『周書』一九楊忠伝)とあり。

(9) 「後避地中山、遂陥于鮮于修礼、修礼令肱還統其部衆、後為定州軍所殺、歿於陣」(『周書』一文帝紀上)とあり、宇文肱は鮮于修礼の部将となるまでに、何らかの集団の統率者であったようである。

(10) 次項の閻氏の手紙参照。

(11) 「尉遲綱、字婆羅、蜀国公迥之弟也、少孤、与兄迥依託舅氏、太祖(宇文泰)西討関隴、迥綱与母昌楽大長公主留于晋陽、後方入関」(『周書』二〇尉遲綱伝)、「尉遲迥、字薄居羅、代人也、其先魏之別種、号尉遲部、因而姓焉、父俟兜、性弘裕有鑒識、尚太祖妹昌楽大長公主、生迥及綱」(同二一尉遲迥伝)とあって、早く父を失った尉遲迥・綱の兄弟は舅家宇文氏に庇護されて晋陽にあったことが分る。ただこの尉遲氏が武川鎮出身であったかどうかは詳かでない。しかし前述のように、衛可孤襲撃に加わった「州里の豪傑」の一人に尉遲真檀なる人物があり、尉遲俟兜―迥・綱も、武川鎮出身者と見てほぼ誤りがないのではないか。

(12) 「崇少驍勇、善馳射、謨慤少言、年十五、随賀拔岳与爾朱栄、征葛栄」(『周書』一六侯莫陳崇伝)、「正光末、以北辺賊起、遂率郷親、避地於并肆、因従爾朱栄征討」(同一五寇洛伝)。并州・肆州地方は、爾朱氏の本拠である。

(13) 『北史』五七周宗室伝は、三男二女に作る。

(14) この箇所の原文は、「又得汝楊氏姑及汝叔母紇干、汝嫂劉新婦等同居、頗亦自適」『北史』では「汝楊氏姑及汝叔母紇干、汝嫂劉及汝新婦」に作る。

(15) 子、卯、巳は、原文ではそれぞれ鼠、兎、蛇と記している。実年代としては五〇八(戊子、宣武帝永平二)年、五一一(辛卯、同四)年、五一三(癸巳、宣武帝延昌二)年を一応比定しうるが、他の所伝と食いちがう点がある。註(24)参照。

(16) 『周書』一文帝紀上および『周書』一〇杞簡公連伝にも、この戦死のことを記す。

(17) 元宝は宇文連の子。のち高歓に殺された(『周書』杞簡公連伝)。このことから連の妻が賀拔氏であったことが分る。

(18) 菩提は宇文洛生の子。のち高歓に殺された(『周書』一〇莒荘公洛生伝)。このことから洛生の妻が紇干氏であったことが分る。

(19) 元宝掌なる人物は北魏宗室の一人であろうが、詳細は明かでない。

(20) 定州・中山郡・唐県の県城であろう。なお左人城も唐県の管内にあったようである(『魏書』一〇六地形志上)。

(21) 『北史』は六七千人に作る。

(22) 北魏孝明帝時代の権臣元叉の腹心に「武州人姫庫根」なる人物があり、元叉や元叉の従弟元洪業と謀反計画に加担しているが(『北史』一六道武七王伝)、おそらく同一人物であろう。なお元洪業はのちに定州の降戸のなかに潜入したらしく、鮮于修

礼を斬って朝廷側に寝返ったが、葛栄に殺された。

(23) 宇文洛生か宇文泰のいずれかであろう。

(24) 註(15)のように宇文護の生年を五一三年とすれば、このとき十二歳であったというのは疑わしい。中華書局標点本『周書』一八三—四頁註(九)参照。

(25) 中華書局標点本『周書』一八四頁註(一〇)は、太原郡寿陽県に比定している。

(26) 諱は祥。『周書』二〇賀蘭祥伝には盛楽に作る。賀蘭初真と宇文泰の姉建安長公主との子である。

(27) 孝荘帝永安三年(五三〇)。

(28) 宇文泰を指すとおもわれる。「太祖初入関、祥与晋公護俱在晋陽、後乃遣使迎致之」(『周書』二〇賀蘭祥伝)。

(29) 孝武帝と高歓との緊張関係が高まった折、光禄少卿元子幹は朝臣を殿りつけ、高歓の腹心孫騰に対してつぎのように言ったという。「爾が高王に語げよ、元家の児の拳正に此くの如しと」(『北斉書』二神武紀下)。北魏宗室の気骨がなお衰えていないことを示したものである。

(30) このとき賀拔岳は、もう暫く関中にあって本拠を固めた方がよいと爾朱天光に勧めたが、天光は従わなかったという(『周書』一四賀拔岳伝)。

(31) 『北史』三六薛孝通伝。ただし同伝に、岐・華・秦・雍諸軍事・関西大行台・雍州牧とあるところを、『魏書』八〇賀拔岳伝では、都督三雍・三秦・二岐・二華諸軍事・雍州刺史・関西行台と記し、孝武帝の永熙元年、行台を大行台に昇格させたとしている。本伝の方がより正確であろう。

(32) 『北史』四九賀拔岳伝によれば、永熙二年高歓は左丞の翟嵩を関中に派遣して、賀拔岳と侯莫陳悦の離間を図っている。

(33) 賀拔岳殺害直後の状況を、『周書』一六趙貴伝には左のように記している。「及岳為侯莫陳悦所害、将吏奔散、莫有守者、貴謂其党曰、……況吾等荷賀拔公国士之遇、寧可自同衆人乎、涕泣歔欷、於是従之者五十人、乃詣悦詐降、悦信之、因請収葬岳、言辞慷慨、悦壮而許之、貴乃収岳屍還、与寇洛等糾合其衆、奔平涼、共図拒悦」。また同一五寇洛伝には、「時初喪元帥、軍中惶擾、洛於諸将之中、最為旧齒、素為衆所信、乃収集将士、志在復讐、共相糾合、遂全衆而反、既至原州、衆咸推洛為盟主、統岳之衆、洛復自以非才、乃固辞」。以上の記述によれば、岳の被害直後、その部隊には大きな混乱が起ったが、趙貴や寇洛がわずかの将兵と共に事態収拾に当り、それを中核に部隊を再建して平涼に帰還したことが分る。

(34) 宇文泰にこの方策をとらせた人に、于謹がある。于氏は鮮卑系の名門。このとき于謹は宇文泰の防城大都督・夏州長史であった。

(35) このとき朝廷では賀拔勝の許に奔るか、あるいは洛陽にとどまって高歓と決戦をはかるか、さらには梁あるいは塞北に亡命するかなど様々の意見が出されたが、結局関中に身を寄せることになったものである(『北斉書』二神武紀下、『北史』一五元毗伝)。

(36) 『周書』一四賀拔勝伝に、「初勝至関中、自以年位素重、見太祖不拜、尋而自悔、太祖亦有望焉云々」とある。

(37) 宇文泰が孝武帝の上洛命令を断った上表文中に、「況此軍士

多是関西之人、皆恋郷邑、不願東下」（『周書』一文帝紀上）とあり。

(38) 『周書』三八呂思礼伝には脱文あり、『北史』七〇本伝による。

(39) 『周書』二九本伝には、耿豪の出身地を神武川としているが、『北史』六六本伝には武川と記している。

(40) 独孤信は宇文泰の父宇文肱らの衛可孤襲殺にも参加したこと、註(7)に記したとおりである。

(41) 北鎮の人的構成については、濱口重國「正光四五年の交に於ける後魏の兵制に就いて」『秦漢隋唐史の研究』上巻（東京大学出版会、一九六六年）参照。なお前田正名『平城の歴史地理学的研究』（風間書房、一九七九年）第四章第二節には、平城・雲中・武川を結ぶ線が絹馬貿易の重要な通商路であったことを述べている。また呼和浩特西北五キロの地点にある坝口子村北魏土城址からはササン朝ペルシャの銀貨三枚が発見されている（上掲宿白論文）。

(42) 「其往世房分、留居京者、得上品通官、在鎮者、便為清途所隔」（『魏書』一八広陽王深（淵）伝）。なお、これよりさき魏蘭根が府主の李崇に向って説いたことばにも、「中年以来、有司乖実、号曰府戸、役同厮養、官婚班齒、致失清流、而本宗旧類、各各栄顕、顧瞻彼此、理当憤怨」（『北斉書』二三魏蘭根伝）とある。

(43) 「或投彼有北、以御魍魎、多復逃胡郷、乃厳辺兵之格、鎮人浮遊在外、皆聴流兵捉之、於是少年不得従師、長者不得遊宦」（『魏書』一八広陽王深（淵）伝）とある。

(44) このことは『周書』二〇賀蘭祥伝にも、つぎのように述べる。「祥年十一而孤、居喪合礼、長於舅氏、特為太祖所愛、雖在戎旅、常博延儒士、教以書伝」。

(45) 「太祖於行台省置学、取丞郎及府佐徳行明敏者充生、悉令旦理公務、晩就講習、先六経、後子史、又於諸生中簡徳行淳懿者、侍太祖読書、……太祖雅好談論、并簡名僧深識玄宗者一百人、於第内講説、又命慎等十二人、兼学仏義、使内外俱通、由是四方競為大乗之学」（『周書』三五薛慎伝）。以上の諸例のほか、鎮民の学問志向を示すものとして、武川鎮民雷紹の例がある。かれは若い時武芸をよくした勇士であったが、鎮府の仕事で洛陽におもむき、「京都礼儀之美」に接して、大きな衝撃を受けた。いわく、「徒知辺備尚武以図富貴、不謂文学身之宝也、生世不学、其猶穴処、何所見焉」と。かくて師に就き、『孝経』『論語』を学んだ。のちかれは賀拔岳の都督府長史として岳の顧問にあずかるが、その識見は、このようにして養われたのである。

(46) ただ漢人豪族にも武人的一面がそなわっていたことは留意する必要がある。拙稿「北朝後期の郷兵集団」『隋唐帝国形成史論』（筑摩書房、一九七一年）参照。

(47) 前掲拙著『隋唐帝国形成史論』六八―九頁。

(48) ただしこのタテの関係も、決して私的隷属関係で律せられるものではない。招募によって両者の結びつきが生れているのは、「義勇」も自由民的位置にあったことを示している。六鎮の乱はこの自由民的位置を根拠として起った。拙稿「北魏末の内乱と城民」（前掲書所収）参照。

(49) 「王盟字子仵（北史無子字）、明徳皇后之兄也、其先楽浪人、六世祖波、前燕太宰、祖珍、魏黄門侍郎、……父羆、伏波将軍、以良家子鎮武川、因家焉」（『周書』二〇本伝）、「賀拔勝字破胡、神武尖山人也、其先与魏氏同出陰山、有如回者、魏初為大莫弗、祖爾頭（魏書本伝、作爾逗）、驍勇絶倫、以良家子鎮武川、因家焉」（同上一四賀拔勝伝）、「賀蘭祥字盛楽、其先与魏俱起、有紇伏者、為賀蘭莫何弗、因以為氏、其後有以良家子鎮武川者、遂家焉」（同上二〇賀蘭祥伝）。ちなみに、賀拔勝伝における莫弗、賀蘭祥伝における莫何弗はいずれも部落酋帥を意味する胡語である（姚薇元『北朝胡姓考』三三頁及び一一七頁）。なお尉遲氏については祖先の出自を記していないが、一般的にいって北魏の尉遲氏（尉氏）は孝文帝の姓族分定において、いわゆる八姓の一つに数えられ、漢族の四姓と同等の格付を与えられた家柄である。

(50) 「独孤信、雲中人也、本名如願、魏氏之初、有三十六部、其先伏留屯者、為部落大人、与魏俱起、祖俟尼、和平中、以良家子自雲中鎮武川、因家焉、父庫者、為領民酋長、少雄豪有節義、北州咸敬服之、信美容儀、善騎射、正光末、与賀拔度（拔）等同斬葛可孤、由是知名」（『周書』一六独孤信伝）。

(51) 宇文泰が武川鎮時代に「交結」した同郷人には、独孤信のほか、侯莫陳崇の兄順がある。「少豪俠、有志度……順与太祖同里閈、素相友善」（『周書』一九本伝）。なお侯莫陳氏も部落酋帥で、順の祖允（『北史』は元に作る）のとき「良家子を以て」武川鎮に移り住んだものである（『周書』一六侯莫陳崇伝）。

(52) 註(5)に紹介した内蒙古烏蘭察布盟の土城梁古城の南城は、墻基の巾約七メートル、残墻の比較的高いもの高さ約三メートルあり、東西一三〇メートル、南北約一〇〇メートルの墻壁を築くには、かなりの人力を要したとおもわれる。ちなみに孝文帝時代に行った源賀の上言は、北鎮創設の実態がいかなるものであったかを示唆している。「乃上言、請募諸州鎮有武健者三万人、復其徭賦、厚加賑恤、分為三部、二鎮之間築城、城置万人、給彊弩十二床、武衛三百乗、弩一床、給牛六頭、武衛一乗、給牛二頭、多造馬槍及諸器械、使武略大将二人以鎮撫之、冬則講武、春則種殖、並戍並耕、則兵未労而有盈畜矣云々」。なお前田正名氏は右の「二鎮之間」は、武川鎮と懐朔鎮の間を指しているとしている（前掲書一四八頁）。

(53) 前述広陽王元淵の上奏に、「昔皇始、以移防為重、盛簡親賢、擁麾作鎮、配以高門子弟、以死防遏、不但不廃仕宦、至乃偏得復除、当時人物、忻慕為之」とある。

(54) このような仲間社会形成のもう一つの例は、懐朔鎮を場とする高歓らのグループである。拙稿「北斉政治史と漢人貴族」『隋唐帝国形成史論』所収、参照。

(55) 破六汗拔陵や杜洛周が年号を立てて真王元年とし、鮮于修礼が魯興と称し、葛栄が広安と称した如きは、いずれも北魏王朝否定の意志を表わしている。

(56) この統合の前提には、いうまでもなく、当時胡漢の豪族（傑）勢力が置かれた危機的状況がある。たとえば、高平の郷帥李賢兄弟に、つぎのようなエピソードがある。「魏正光末、天下鼎沸、勅勒賊胡琮侵逼原州、其徒甚盛、遠昆季率励郷人、欲図拒守、而衆情猜懼、頗有異同、（賢弟）遠乃按剣而言、……今若棄同即異、去順効逆、雖五尺童子、猶或非之、将復何顔以見天

下之士、有異議者、請以劍斬之、於是衆皆股栗、莫不聽命、乃相与盟歃、遂深壁自守」（『周書』二五李遠伝）。

(57) 『北史』本伝は隴西・成紀の人と記す。

(58) 『周書』一九本伝に、王雄は大原の人とあるが、字を胡布頭（『北史』では雄胡布頭に作る）といい、賀拔岳字は阿斗泥というのと同じ言い方であって、非漢族とおもわれる。いわゆる烏丸王氏であろう（姚薇元『北朝胡姓考』二五五頁、参照）。

(59) 濱口重國「西魏の二十四軍と儀同府」上掲『秦漢隋唐史の研究』上巻所収、参照。

(60) たとえば、尉遲綱は天和四年（五六九）に五十三才で歿しているから、大統十六年（五五〇）には三十四才であった。ちなみに、迥も綱も、賀拔岳の西征の折にはまだ幼少で晋陽にとどまっており、その後関中に呼び寄せられたものである。ただ大統十六年に三十六才であった（中華書局標点本『周書』二〇註〔一五〕参照）賀蘭祥が、なぜ尉遲兄弟よりも一等級高い大将軍の地位にあったかは不明である。もっとも、尉遲迥は大統十六年を過ぎることあまり遠くない時期に大将軍となり、北周朝成立するや、達奚武・豆盧寧・賀蘭祥らのクラスと同時に柱国となっている。賀蘭祥が死んだとき、尉遲迥がその大司馬の地位を襲っているのは（上掲『周書』註）、両者がほとんど同等の地位にあったことを示すであろう。なお、尉遲綱が柱国に昇進したのは、兄より九ケ月おくれて明帝即位の時である。

(61) 「韓果字阿六拔、代武川人也、少驍勇、善騎射、賀拔岳西征、引為帳内……以功授宣武将軍・子都督」（『周書』二七本伝）。「王勇、代武川人也、本名胡仁、少雄健、有胆決、便弓馬、膂力過人、魏永安中、万俟醜奴等寇乱関隴、勇占募随軍討之、以功授寧朔将軍・奉車都尉」（同二九本伝）。「宇文虬字楽仁、代武川人也、性驍悍、有胆略、少従軍征討、累有戦功、魏永安中、除征虜将軍・中散大夫、加都督、魏孝武初、従独孤信在荆州云々」（同二九本伝）。なお、姚薇元『北朝胡姓考』一二六―一二八頁によれば、韓氏は本姓破六汗（韓）氏という。また王勇の人となりに関するつぎの記事は、本文の推測をたすけるようにおもわれる。「勇性雄猛、為当時驍将、然矜功伐善、好揚人之悪、時論亦鄙之、柱国侯莫陳崇、勲高望重、与諸将同謁晋公護、聞勇数論人之短、乃於衆中折辱之、勇遂慙恚、因疽発背而卒」（『周書』二七本伝）。

（附記）　本稿は昭和五十七年度文部省科学研究費総合研究(A)「中国士大夫階級と地域社会との関係についての総合的研究」による研究成果の一部である。

（たにがわ　みちお　京都大学文学部教授）